

最近、毎日のようにTVの料理番組にコショウをスパイスとして使用する画面が見られます。

このコショウの原産地は、南インドのガッツ地域で、海と陸のシルクロードを経てヨーロッパへ搬出され、古代から中世にわたり金銀に匹敵する高価な財宝として取引され、小作料、地代、持参金等に代替できる高価なものでした。熱帯作物としてのコショウは、10世紀にヒンドゥー教と共に東南アジアのマレーシア、インドネシア、タイ等の国へ伝播されたと推定されます。1299年、マルコポーロの「東方見聞録」によってコショウの生産地が明らかになり、この高価なコショウを求めて航海ブームが起きました。1492年、イタリア人コロンブスは、スペインのイザベル女王へ航海計画書を提出し賛同をえて、同年8月3日パロマ港を出港しアメリカ大陸を発見したことは一般に知られています。しかし、12月6日エスピノーラ島(現在のドミニカ共和国とハイチ)へ寄港したことは余り知られていません。

ドミニカ共和国では、1992年コロンブス来航500年記念行事が開催されました。この同時期に日本政府(JICAプロジェクト)による農業技術協力が実施され、このエスピノーラ島にコショウの花が咲き結実しました。貧しい小規模農家に働く意欲と自助努力が芽生え、共同作業が実施され、農家がお互いに助け合う農業協同組合の設立へと発展しました。

ところで、「コショウの丸呑み」という諺をご存知でしょうか。コショウを丸呑みしますと何も味わう事が出来ません。しかし、噛み砕くことによって強烈な辛味と香りを味わう事が出来ます。即ち、物事はあらゆる角度から吟味する必要があるという意味です。

私は、コショウの主要生産地のインド、インドネシア、マレーシア、ブラジルの体験から栽培形態を集約的栽培(近代的農法、マレーシア、ブラジル)と粗放的栽培(慣習的農法、インド、インドネシア)に分類しました。前者は、堅木支柱、高生産費、高生産量、投機的、雇用労働であり、後者は、生木支柱、低生産費、低生産量、非投機的、自家労働の栽培法です。

インドネシアの栽培体験から前者と後者を比較して見ますと、後者は、低生産費、低生産量であります。農家の生活とコショウが密着した関係にあることを観察しました。現在、世界で問題になっている自然環境の観点から、この栽培法は500年以上も自然環境を維持した生態的農業で、理論的、持続的な栽培が営まれ、現在も維持されている事を理解しました。生木支柱のデイクは、マメ科植物でコショウと共生関係にあり、コショウの生産が減少、収穫皆無になっても、生木支柱は樹木として生育し自然の緑化を維持すると共に熱帯土壌の肥沃度を維持するアグロフォレストリーです。また、ドミニカ共和国では1~2月になりますと山の麓が赤く染まり、現地ではアマポーラと呼ばれる樹の花ですが、近づいて見ますとそれはデイクの花でその下には、コーヒー、カカオが栽培されています。デイクがカカオ、コーヒーの日陰樹として植えられ樹高15M以上、直径1.5M、栽植間隔10Mに植えられ歴史を感じました。

このように栽培には歴史があるので、発展途上国への技術移転に必要なことは、相手国を理解し農家のための適正技術を開発する事であって技術を強制するものではないと考えます。主体は、相手国であり側面から手助けするのが国際協力の基本ではないでしょうか。



▲ JECK展示での一場面



▲ 若き日の後藤専門家(昭和40年 協力隊第一回派遣)前から2列目、左から3人目

タウゲ(ブータン)さんの技術研修をサポートして

菊池 正夫会員

昨年5月より、ヒマラヤの南麓斜面に位置するブータン王国(人口70万人、首都ティンプー、標高2,600m)からタウゲさん36才が来日、県の国際研修センターで3ヶ月間の語学研修を終えた後、県の藤沢土木事務所の青島課長の下でアスファルト道路の舗装技術(構造設計、施工、品質管理など)について、3月までの予定で技術研修が続けられている。

氏は昨年11月、県の技術職員を対象としたアスファルト舗装の品質管理試験に関する2つの実習コースにゲストとして参加されることになった。このコースは日本語のテキストを使用し、日本語で説明が行われたため、技術英語の分かる帰国専門家の支援が必要ではないかということになり、県の国際課からの依頼で募集があり、専門外の技術分野であったが、小生がお引き受けすることにした。

タウゲさんはオーストラリアのニューサウスウェールズ大学の修士課程で道路舗装工学を学ばれた優秀な技術者で、実地研修ではいつも先頭になって測定や実験に取り組み、具体的な専門技術上の質問を連発していた。

研修終了後も、道路工事に使われる建設機械の英文技術資料の取寄せや氏が帰国後、派遣元のブータン政府道路局調査・設計部で、カウンターパートとして一緒に仕事をされるシニア海外ボランティア、河野宏氏との懇談をサポートするなどして喜んで頂いた。

タウゲさんの趣味はトレッキング、河野さんはマウンテンバイクと野鳥観察、2人は良きパートナーとなって着実に成果を挙げていかれることであろう。

今回の体験から、このような帰国専門家による技術サポート活動は地域との連携を強化して、国際協力事業の質的レベルの向上をはかって行く上で、大変有効ではないかと感じた。



▲中左が菊池会員

チュデュップ(ブータン)さん見学同行記

石井 信行会員

神奈川県国際課からの依頼を受け、2月17日チュデュップ(ブータン王立会計ITマネジャー)さんに同行して、富士通館林システム・センターを見学した。チュデュップさんは、県の情報システム課で研修を受けていたが、日本の進んだ実例として、当センターの見学をすることになった。私の役割は彼のため、通訳とITの技術的アドバイスであった。ここでの主要業務の説明を受けた後、センター内のコンピュータ室や設備を見学した。チュデュップさんはこのような大掛かりなコンピュータセンターを見たのは初めてであった。ガラス越しにみるオペレーター、スーパーバイザー、チーフスーパーバイザー毎に色分けした服を着て、それぞれの役割をこなしている姿は印象的だったようである。特にお互いのオペレーションが見易いように、円形に配置されたPCと大型スクリーンのあるオペレーション・ルームを見ていた時、これはNASAの衛星追跡のコントロール・ルームに似ているなど楽しい会話をしながら見学して回った。このシステムは神戸大震災の震度でも、充分堪えられるような強力な耐震構造になっている。最近の傾向として、自然災害よりも多発するウイルス災害や、今起きるかも知れない多発デモ災害など人的災害対策に重点が置かれている。ブータンでは、彼によれば、ここ数年の間に、JICAの協力などにより、PCやインターネットが急速に普及している。これらのITはGNH(Gross National Happiness:国民総幸福)の増進のために活用され、教育、医療などに優先的に計画されている。このGNHの目指す施策により、教育、医療は原則的に無料にし、癌などの重病人は医療の先進国



▲左が石井会員

であるインドに送られ、これも無料だそうです。この施策は国王のリーダーシップにより推進され、国王は国民から敬愛されているようです。ITを国民総幸福向上のために活用するというテーマは素晴らしいと思いました。チュデュップさんの日本でのIT研修がブータンのGNHに貢献することを祈りつつ・・・